

「新時代」と人類の使命

～正伝キリスト教の人間学の心眼でみて～

☆

The 'New Age' Anthropology
～A Catholic Anthropological Evaluation～



善意で真福を探し求める人々に捧ぐ

霧島 怜

Rei S. Kirishima

目 次

序 新時代的な現代人のココロ

1. 「新時代」と正伝キリスト教の人間観
2. 「新時代」と正伝キリスト教の救済観
3. 「新時代」と正伝キリスト教が示す人類の使命

結語に代えて～愛の空白化と人心の冷酷化

註と主な使用文献

Resume

序 新時代的な現代人のココロ

「新時代運動」(以下は新時代)は全宇宙と人間的な秩序、特に意思的と科学的な活動の根本道理である「因果法」を無視又は軽視する。この因果法の活現の一種である「縁起法」、「業報法」と正義法、特に正邪、真偽と善悪の現実を否定すると共に絶対的な秩序は全く要らない、相対的で支離滅裂の淘汰(一けた道理、目的、計画、方向性、誘導力、摂理や管理の無い行き当たりばったりで極めて残酷な活現)、個人的な「好い気」や自己本位を公私諸活動の原理とする。かくて、彼らは、慈愛と私利、善悪の正義と無慈悲(復讐)、自由と勝手気まま、人権と私欲、平等・公正と公平、成功と「勝ち組」、アイドルと義人、迷信と正信、真神の啓示と神憑り師のお告げ、真神の崇拜と偶像の崇拜、真福と「好い気」、神仏式・ホテル式と正伝キリスト教徒の結婚や葬儀の内容、価値とその結果の相違を識別しない。よって、彼らのこころの世界はお正月の福袋の売り場、初詣や大祭り、オリンピック、サッカーのワールドカップや野球トーナメントの閉開式、歌手のライブや現代群衆主義国家の選挙騒ぎのようなものである。

彼らは新人類の反一神教的な極楽を確固たるものにするために、正伝キリスト教が示す「愛天愛人」の道を撲滅し、真のキリスト教徒を陰湿的に差別し、その道德教育を切り捨てると共に進化論的と無神論

的な教育に全力をあげている。彼らは自己本位を絶対視し、自然環境を神聖視し、人権に匹敵する動物権利の法制化を要求する。一方、彼らは自然淘汰を理由に、世界中で極貧と飢餓に瀕する人々を救うために資源と財の公平な分配を拒否し、人間的な胎児の墮胎(殺害)自由権を促進し、優生学的な劣者の不妊手術を強要し、同性結婚の法制化に励み、本位気儘の偶像崇拜を公励し、名利私欲と快樂の追求及びグッドフィリングの生き方を人間らしい幸福の道として幼稚園から推し進めている。

以下、人、その使命、目的、運命、人心の教育、という人間の一大事に対する新時代の回答を説示し、主として、正伝キリスト教との根本的な相違を明確にする。

1. 「新時代」と正伝キリスト教の人間観

新時代によると、人間は宇宙万物と共に進化し、靈的な発展を図りながら自らの能力を自己本位的に活用することによって自己神格化の完成を最終目的とする「普遍的大意識の燐光」、「神聖な大靈知の一現」や「分神」である⁽¹⁾。神的燐光としての我々は言葉通りに神の子らであり、本来清浄で神の境地を得る能力を内秘し、神的な光と愛を本有する「ミニ女神」と「ミニ男神」(“I am god”)である。他の諸靈と同様に宇宙万物の創生以前に「神」^[特註]と仮称される「普遍的、内在的で非位格的又は無位格的な大靈知力」(大靈我、超意識)という世界の内に神聖な「波動」の発生と同時に出現した人霊が今もこの波動によって生かされている。人間同士がお互いに交信したり自覚したり、お互いの波長を合わせたりすることが出来る。そして、この「生命波動」こそ、人間を含む靈的な万物の生命機能を養生する原動力であり、万物の進化と発展の主導力である。この進化は心身においても靈知においても不可避的なものであり、特に靈的な発展が精神文化の構造、内容と価値観の大転換を必ず引き起こすと予想されている。そして、この心身的な進展は大靈知伝波の一種である輪廻転生力と人魂移住力に因って行われると新時代信奉者が主張する。

E. ケーイシーと J.V. オーケンによると、人霊と人魂とが本質において同一者であるが、その存在様態において異なる。人霊は普遍的で意識的な大靈知界の内に神聖な波動によって創生された「大靈知の一点(燐光)」であるのに対し、人魂は「人間的な身体を受け取って現世に活動する大靈知の同じ一点」である。創世以前に大靈知界(神)の中に殆んど見分けのつかない、数え切れない意識的な大小の純霊が創生され共存していた。よって、純霊としての我々は神の真の子らの初代世代であり、完全で無罪、永遠に若くて幸せな者である。我々は神質の燐光、即ち「分神」である以上、何を考えてもどんな事をしても何時も神の代行である創生と救済において神の親しい協力者である。E. ケーイシーの忠実な随従者である J.V. オーケンは人霊の創生、その意識的な目覚め、自己陶醉、自己中心的な活現、自己孤立、自他の精神的な疎外感(原罪と墮落)及び物質との結合道程を下記の通りに説述する。

『秘伝の教えによると、神である普遍的な大靈知が自らの存在を分かち合いたく、自分に似た仲間を出現させたかった。…こうして、唯一の大靈知の内に…無数大小の個的靈知点(自己意識点)が覚醒せられた。…この時点で彼らは現世的な身体がなく、神の意識の中で単なる無数の個念であった。…最初皆は静かで神の靈知から次々と流出していた個霊を観想していた。…当時、我々の正体が創生主たる「神」と識別することが不可能であったほど皆は神と一つであった。…しかし、ある個的靈知点(個霊)が生得的に賦与された自由意志を使い始め、自己を表現し始めた。先ず、創生主の活現を真似していたが、次第に体験を積むに連れ

て自己本位に従って新しい霊界の数々を造り始めた。…しかし、創生主はそのためこそ彼らを創生したのである。つまり意識、自由、想像力、理解力、記憶、生命普及力、交信力を本有する真の同伴者と協力者である彼らを創生したのである。…勿論、神は個霊の長短と利害の範囲をよく知っていたが、やはり召使ではなく、自由な活動と自由責任から来る自己完成の喜びを味わう協力者を創生した。…或る個霊は私利の追求、自己満足、自己陶酔的な活現の結果として普遍的な創生主及び他霊との精神的な疎外感、孤立と不和を加速させた末、自命の源泉との連絡を断ち、存在の目的意識も薄れてお互いの疎散と愚鈍化、つまり、精神的な闇黒と「悪」(無知の活現)が拡大し始めた。…それこそ我々の「墮落の原因」となった。…創生主が因果律と業報法を報復や賞罰としてではなく、教育の方便と開悟の道として創設した後、自分の内に覚醒された個霊点を彼らの本位に任せたのである。…各々の個霊が唯一であり、全く同じ者はいない。…かくて、神の同伴者たる個霊は成長したり成熟したり、勉強したり、様々な体験をしたりするために神が創生した宇宙、銀河の世界へ飛び立った。…或る者は地球付近に寄って来て物質と結合し、「人間」として生きる事となった。…時が経つにつれて彼らの大多数は自分の本来の正体(神性)、起源(大霊知界)と存在の目的(神との自由で意識的な再結合)を忘れ、自分が身体、物質と死ぬ者であると考えようになった』(2)。

新時代の教師によると、一神教が説く正邪、真偽と善悪が対立的なものでなければ、人間が行う罪悪によって神から離れることもない。更に、人は「罪」や「悪」を犯すのではなく、正しい知識の欠如によって「間違い」又は「的確でない行為」だけをするが、人魂の輪廻転生の御蔭で必ずそれらの諸行を修整し、改正できると考えられる。人は神、宇宙、相互関係及び自分の救済に関する謬知によって精神的にのみ神から離れ、自らの神格化達成の時を延期するだけである。勿論、正伝キリスト教の価値観からみれば、善行の他に犯罪や凶悪があると断定される。しかし、新時代の価値判断ではどんなに残酷で陰惨的な行為をしても、人々は「神」の一燐、一部、分神である。換言すれば、未完成の女神と男神である。よって、個人と社会は向上的で善良な進化、つまり、自己神格化の道から絶対に逸れる事はないし、行為の全ては神格化の道幅の内にあり、客観的な「学習の一行」であり、「勉学の体験」、「主体的教育の一段」や「自己完成の試行」に過ぎない。「臨死体験」の研究者であり、新時代の権威でもある H. ストーム(牧師 H. Storm)によると、自分の臨死体験中で案内霊によって自らの悪徳人生を映画のように見せられた際、自分が神を否定しながら冒瀆し、自己中心的に生きていたにも拘わらず、彼を案内した諸霊が彼の人生を「善悪」という見地で判定したり、叱責したりしなかった。逆に、彼らに非常に愛されていたと実感し、「人間の行いの全てが学習であり、勉道の体験に過ぎない」と何度も念を押されたと伝えている。そして、新時代の多くの信奉者は凶悪犯罪が「悪ではない。悪も悪人も存在しないからである。存在するのは単なる無知だけである」と力説する。彼らの仲間である K. ウィリアムスは『ヒトラーへの完全な愛』と『完全な師なるヒトラー』という章の中でこう述べている。

『我々はヒトラーを悪の化身と見なし、今地獄の永遠の火の中に燃えていると考えている。…我々は彼を悪魔として見せるために彼の人間性を否定する。しかし、彼をこんなに残酷で恐ろしい者にしたのは「人間性」そのものである。…彼は画期的な間違いを犯したが、〔あの世で〕自分の人生回顧の映像を見て誰よりも学び、きっと画期的な知恵を得た。…大きな間違いから多く学ぶ。…臨死体験の教示によると、神はヒトラーを含めて皆を無条件に愛する。だから我々も、ヒトラーを含めて皆を無条件に愛せねばならない。…彼も天国に入ることを我々はよく解っている。…臨死体験の啓示から観れば、ヒトラーが悪人ではなかった。何故かと言うと、悪は存在しないからである。存在するのは間違いだけである。…ヒトラーを精神遅滞者、精神的に非常に未熟な者、…精神病の患者として理解すれば、彼をも無条件に愛することができる』(3)。

この論理に沿って言えば、国家神道が生んだ戦争、広島と長崎の投爆、スタリニズム、毛沢東主義、ポルポト、ベトナムやイラク等の諸戦争、民族浄化、胎児の多量抹殺、政経的なテロや拉致、経営健全化の副作用である毎年の数万人自殺、大学教員組織内の陰湿的差別等は大した出来事ではない。何故かと言うと、「悪は存在しないからである。存在するのは間違いだけ。…大きな間違いから多く学ぶ」というチャレンジ精神の一路だけである。

新時代が待ち望み、積極的に準備している「輝かしい時代」の道義、特に罪悪の識別、悪人の処罰、良心の呵責、自己本位の抑制や改心を必要としない生活と社会秩序を描く数文を以下に紹介する。

『人間性からみると、間違いが容認される行為である。我々は犯したい間違いを犯してもよい、何故かと言うと、それを通じて学ぶからである(H.S.M)。…世界が言う「罪悪」というようなものは存在しない。霊界において我々の意思のみが重要である。何故かと言うと、愛と光が人間性の神髄である(L.S.S)。…どんな靈魂であってもそこに悪が一切ない。人々を混乱させているのは愛の欠如だけである(M.I.ベネディ)。…ある夜、暗くした部屋で、テープレコーダーが回り、…75人が見守る中で私は(E.キューブラー・ロス)は死ぬ時にしか体験しない事を体験した。…その時に守護霊(大男)から、この実験企画の意味を教えられた。…「皆に告げなさい、…私たち皆は無限に愛され、理解され、祝福され、導かれているのだ、と。…自分の中のヒトラーを直視し、それを表に出し、裁くのではなく、哀れみではなく、共感、無条件の愛と同情を学びなさい。…何時か私たちは…本来の家(大霊知界)に帰り、皆が又一緒になるのだ」と。…私達西洋人がこの身体を離脱した人魂がみる極めて目映い光りを「キリスト」とか「神」とか「愛」と呼びますが、その光の前に立った時、私達は絶対的な無条件の愛、理解と共感に包まれる。この光は…マイナスの感情が一つもない存在領域のエネルギーなのです。…しかも、「キリスト」とか「神」とかに裁かれることも絶対にありません』(E.キューブラー・ロス(AD.1926-2004)医師の臨死体験から)⁽⁴⁾。

更に、新時代は「小神」である人がこの世においても死後においても自己神格化の完成に最適な生まれ変わり、生活様式とその諸能力、境遇と周囲環境を恣意的に選定することが出来ると主張する。こうして、人は各種の占術、神懸り、交神術、降霊術、催眠術、呪詛術、薬物服用によって引き起こされた体外離脱体験や臨死体験等の秘儀及び獲得した秘伝神知を通じて自分の霊的波長を大霊知界と万物の波長に合わせ、自分の現実を恣につくることが出来るとされている。新時代の或る医師、心霊学者、超心理学者や霊媒師によると、人の脳に有る「神点」(Divine Spot)という部分を薬物や瞑想等で活性化させることに因って何時でも宇宙の記憶蔵(霊気界)と交信し、自他運命に関する知識と情報を得、それを自他の神格化完成に役立たせる生得的な能力が皆に潜在する。人魂の輪廻転生が処罰でなければ永遠に続くのでもない。何故かと言うと「神」は因果律、業報法と輪廻転生を慈愛の故に創設し、万霊の神格化を確実なものとする為に普遍的な道として設定したからである⁽⁵⁾。

新時代唱道者の大多数は古代中東、特にギリシアとローマの多神教的秘伝が説いた人魂輪廻説と人魂移住説の他に人魂先在説も受け継いでいる。この説によると、万人の靈魂が創世以前に神によって神界内で創生され、住まわされた。そして、この世に最初に生まれる前だけではなく、無量の輪廻転生の合間にもそこに在留しながら自らの使命である自己神格化の成就を気随に図る。人魂先在と生まれ変わりの事由が次のように描かれている。

『我々の靈魂は創世以前に存在していた(A.F.ニエル)。…我々の靈魂は被造物の初穂として創生され、「神」に帰る途中である(E.ケーシー)。…我々の靈魂は身体を以て生まれ変わる前に諸霊界で永遠に近い期間を過す事が出来る。それも存在の大義(つまり自己神格化の完成)を全うすることが出来る(N.S.ブルギ)。…我々の地上存在の大義・目的のうちに我々の家族への愛、前生諸行の応報享受とそ

の清算が含まれている(Eキー)。…死後の霊界に居る或る靈魂は素早く、或る靈魂は長く次の生まれ変わりを準備するが、何れは生まれ変わりの道を選定する。精神的に恵まれた霊界の環境を離れ難いが、身体を持って生きた時の享樂の思い出も強く懐かしいから、結局再度に自己存在を心身的な形状を通して表現したいという気持ちは勝つ(M.ニュートン)。…〔一方、或る古い秘伝書によると、〕人を呪う者は絶えず悶心が宿る身体を受けて生まれ変わる。…泥棒は眼の見えない、足を引き摺る奇形の身体を受けて生まれ変わる。…ほとんどの人魂は暗黒と拷問の環境である地獄を通過した後、又新体験を積むために地上に生まれ変わるが、僅かで極めて兇悪の人魂だけが闇黒の淵に投げ落とされ、苦しんだ後、徐々に分解され、破壊される(『信仰の英知書』)⁽⁶⁾。

M. ニュートンによると、人魂転生の過程とその内容は、科学者として秘伝神知に精通するある霊媒師、霊懸り師や交霊術師が指揮する催眠会、内観の集い、交霊会、輪廻転生回顧会等の如き研修会の席で明らかになった。これらの研修会の時に実験対象者の意識が変転する中で、体験者は自分の前生とその輪廻の記憶を取り戻し、自らの来生とその輪廻を透視しながら霊界を旅すると或る者は主張する。かくした研修会で名を高く上げた M. ニュートン、B. ベタルツ (Betty Bethards)、E. ケーイシー、S. ロジェルス (Sandra Rogers) と F. オスキ (Frank Oski) 他は人魂が死後に住ずる霊界で如何にして自分の次生を準備し、決定するかという道程を下記の如く描写する⁽⁷⁾。

- 一、個霊が身体を享受し、人間として生まれ変わる時に「人魂」と呼ばれることになる。この個霊は次生の境遇環境、つまり、新転生の目的、最適な形状と自己発展段階を明確にし、決定する。
- 二、霊界内にある「新人生予定の上映場」(Life Pre-play Theater)で自分の過去輪廻と次生に最適で可能な多数の形態、能力、境遇と環境が眼前に上映される。その時に罪意識、罪悪感や後悔のような気持ちが全くない。
- 三、次に選定した新次生全般に関する「研修会」が行われる。
- 四、研修会が終わったら「長老上霊議会」にその報告が行われ、新次生決断の詳細が確定され、承認される。ここは靈魂の全知、完全な自由と霊界との意思疎通の最後の時場である。
- 五、地上に生まれ変わろうとする諸霊の能力、性能、知識と記憶は霊界で忘却され、抹消される。よって、人魂は過去にこだわらず地上で好きなように生きることが出来る。
- 六、不自由な心身を受けて地上に転生する個霊に沢山の霊的な特権と報酬が伴う。
- 七、個霊のより速やかな自己神格化達成の為、上述した過程は自由本位的に遂行される。

以上は新時代の潮流が唱道する人間観の心髄であるが、それは歴史的なイエズス・キリストの教示でなければ、使徒教会を初めとする正伝キリスト教(カトリック)の教理でもない。よって、イエズス・キリストの教示を継承し、その心髄をまとめている『カトリック教会の公教要理』(1997年にローマ教皇庁によって出版された英語版“Catechism of the Catholic Church”(以下、“CCC”), 2002年に日本カトリック司教協議会によって出版された同要理の日本語版、「カトリック教会のカテキズム」(以下、「カカ日」))とその公教要理の歴史的な発展と内容を纏めたデンシンガー他編の『カトリック教会公文書資料集』(日本語訳と英語訳(以下、デ・))を基に新時代風行と正伝キリスト教の人間理解における根本的な違いを明示する⁽⁸⁾。

第一に、人間の出現。正伝キリスト教は人間が「神」と称せられる普遍的な大靈知力によって無数の個々の靈知点として覚醒され、その正体が創生主と識別出来ないほど神と一つであったという教説を否定する。正伝キリスト教によると、一切世界を隔越する「三位一体」的な天主が無償の恵愛を以て自分に

象って男と女とを創造した。この創造とは人祖を初め、万人の個魂が父母の産物や遺伝でなければ、天主の一部でもない。天主は自分に象って各々の男と女との為^レに人格的で個性的な靈魂を「自分からでなければ、自分以外のものからでもなく、絶無から」(ex nihilo Suoi et subiecti)直接に創造する。そして、各人生命の直接的な本源である人格的な個魂も、人体も天主と全面的に異性で異質的なモノである。そして、人類全体であろうと世界の皇帝であろうと、三位一体の天主に変成することがなければ、この天主の徳力と性能を学習や進化を通じて永遠に手に入れることが出来ない。〔“CCC”と「カカ日」, 355-373条, 更に、左条に該当する「デ・シ」の諸条を参照〕。

第二に、人間の性質と原罪。或る靈知点は生得的に賦与された自由を使い、氣随に自己を表現し始めたことによって創生主と靈界全体との一致感が薄められ、連絡が断ち、靈魂同士の疎散、精神の闇黒化と愚鈍化が急進した。これを見た創生主は因果律と業報法を諸靈の学習方法と改悟の道として創設した後、諸靈を自己本意に委ねた。或る靈魂は地上で物質と結合し、人間として生きることになったが、時が経つにつれて自分の生得的神性と故郷及び存在の目的を忘れ、自分達が滅びる物体であると考えようになったという諸説は正伝キリスト教と無縁である。更に、「神と諸天使の同性同質説」や「靈魂の自力救済説」も初代教会の当初から排擯されている。正伝キリスト教は天使の創造、天主の神権に対する天使一部の反逆試行、謀反の失敗、神罰、人祖の創造、原罪(自己神格化の試行と神智の軽視)、神格化の失敗、天主の恵愛と赦愛に満ちた処罰とを区別して理解する。何故かと言うと、天使性と人間性とが永遠に異なり、お互いの位格(personality)を交換したり変性したり、お互いに進化したり退化したり、変成したり打ち消したりすることは(出来)ないからである〔“CCC”と「カカ日」, 328-395条〕。更にキリスト教の正伝によると、天主は人祖を創造した時に現象界と人間性の自然を越える「聖性と義」の境遇を彼らに恵賜として授けた。しかし、我々の人祖は自分達の全存在と栄福の恩者である天主の親愛と忠告を軽視し、その無限叡智の掟を自由意志で無視した。その代わりに、自らの正体を明かさずに、「あなた達は神々の如き者となり」という魅力的で蠱惑的な展望を提供した悪魔を信用して「創造主なしに、創造主に従わず、創造主のようになろうとした」のである。「原罪」とは、大多数の人魂が自分本来の神性(“We are gods”)と故郷及び存在の目的を忘れ、自分達が滅びる物体であると考えように至ったという無知ではない。「原罪」は、絶対神の叡智と無上恵愛の掟を無視し、自己本位を最優先して絶対神なしに、絶対神に従わず、絶対神を超えて超絶対神になろうとした人祖アダムとエウァの自由で心身的な行動を指示する。警告の通りに、天主は人祖の謀反に対して慈愛の正義を以て彼らとその子孫に与えた聖性と義の一部、人心の特別な無苦と身体的な不死という恵賜を取り下げ、自由決行に対する責任を問い、自然で必然的な罪罰(果報)を処する。しかし、天主は人類を見捨てることなく、直ちに対策を図ったと正伝キリスト教は教示する。〔“CCC”と「カカ日」, 375-421条, 更に、左条に該当する「デ・シ」の諸条を参照〕。

第三に、人魂の先在と輪廻転生。正伝キリスト教は新時代の信奉者、例えばE.クレル・プロフェットが押し広げている諸靈移住説、人魂の先在説や輪廻転生説を初代教会の時代から今日に至るまで一貫して排斥する。それについて『人の死と死後』という論文の中で説明した。その詳説をここで省略するが、最も重要な4文だけを再記する⁽⁹⁾。

一、『人が一度だけ死んでその後、(超絶的な天主の)審判を受けると定められている』(ヘブライ人への書簡, 9₂₇)。

二、『人魂輪廻説が神の教会の教理と異質的(外來說)であって、使徒達によって伝えられて来たのでなければ、聖書の中にも根拠がない』(オゲネス, AD.248年)。

三、『人間の靈魂は先在していた、即ち人魂は靈又は聖なる能力として存在していたが、(絶対)神の観想に飽き、悪に傾き、神の愛を失い、罰として肉体と結合するようになったと主張し、考える者は排斥される。救い主(イエズス・キリスト)の靈魂が前もって存在しており、受肉し処女から生まれ出る前に神である御言葉と一致していたと主張し、考える者は排斥される』(『デ・シ』[コンスタンチンブル教会公会議の勅令]について、403-404,456 条)。

四、『死は人の地上の旅の終わりであり、(絶対)神が人々に…与えた恵みの終末でもある。…そして、「我々の地上人生の一回限りの行程が終わった後」この世に再び生まれることがない。(何故かと言うと)、「人が一度だけ死ぬ」ということは定められているからである。この世で死んだらもはや輪廻転生もない』[“CCC”と「カカ田」, 1013 条]。

新時代の伝道師達は諸靈移住説と人魂の輪廻転生説を間違っけてキリスト教的な説として扱う主な理由が下記の通りである。先ず、キリスト教、ユダヤ教と似非キリスト教系の諸説を識別しない。次に、正伝キリスト教と正伝ユダヤ教の公認聖典を様々な理由で「偽書」とし、外典偽作書である「五福音書」(Gnostic Canon)、古代中東混合教、絶対不二一元論的ヒンズー教、仏教系と各地土着迷信の経典を真の聖典と見做し、諸占術、諸呪詛術、各種交霊術と服薬下に得られた「啓示」を不可謬の神知と観ずる。例えば、R.シタイナー、A.ペイレイ、D.スパングレー、E.ケーイシーや E.C.プロフェット他の迷想を不可謬的な教えとして伝承する。又、正伝キリスト教と正伝ユダヤ教の公認聖典、使徒達と教父達の書簡を非学問的と詭弁的に解釈する。そして、特に正伝キリスト教の教行信証の真正に対する嫉妬、敵意と蔑視も彼らの著書内に多い。

第四に、善悪の言行に対する責任。新時代は絶対神と人間、正と邪、善と悪、賞と罰を区別せず、因果律と業報法を無視し、自己神格化、自己本位、自己自讃、私利私欲、偽善、つまり事実上で無責任な倫理と道義感を学問的に正しいと観て、新人類に相応しい生き方として唱道する。一方、正伝キリスト教はそのような思考と公私秩序を全面的に否定する。新時代が主張する自由本位的で愉快的な生き方(feel good life)と愛はキリスト教的な「愛」と「赦し」とは全く違う。正伝キリスト教は絶対的な罪悪を認め、それを本音で悔い改め、二度と犯さない固い決心をし、告解の秘跡を含めて本音で謝罪し、適切な賠償をして初めて天主にも人にも赦される。しかし、新時代は絶対的な正邪善悪を認めない以上、懺悔、改心、謝罪、贖罪と赦罪が元々無意味であり、空言であるということに尽きる。それに新時代が目指す人魂の自己本位的な神格化の道において正邪、善悪や誠偽を問い、それを裁き、罪を赦す位格的な超絶神(Deus Personalis & Transcendentalis)は存在しない。彼らによると、キリストも、釈尊も、H.P.ブラヴァツカも、A.ヒトラーも、マザー・テレサも、諸戦犯者とテロリストの人魂も、皆同じく単なる「間違い」をしながら学び、自分たちを高め、自己神格化を目指していたのである。一方、正伝キリスト教によると、唯一の超絶神は万人を愛し、恩寵、英知の光と慈しみを恵み、個人に人間性の一部として賦与した自由決断力を尊重することによって各人に自分の永禍又は永福を実現させている。しかし、至善至聖の天主は無秩序と勝手気儘を無視せず、真正な秩序を平気で偽善的又は恣に破壊する者達にその行為の果報を味わわせ、責任を問い、正当な処罰を科するのである。それと同時に天主は悪を断じ善に努め、罪を償う人心の姿勢が欠かせない「愛天愛人」の道を誠心誠意に歩む者達をより多く愛するという考え方は真正なキリスト教の通説である。更に、罪悪、特に凶悪で偽善的な犯罪がもたらす被害者や無防備な者達の苦しみを考えると、『世界が言う「罪悪」というようなものは存在しない…我々は犯したい間違いをすべて犯してもよい。それを通じて学ぶからである』という考え方はキリスト教だけではなく、道義の根本と人類の良心に対する侮辱に他ならな

い。この考え方は事実上で進化論が主張する支離滅裂の自然淘汰の道理と汎神教が提唱する万物の無目的性を源泉とし、ニーチェイズムの殺神主義と人間優劣主義、悪(魔)の崇拜、天皇制の差別主義、諸指導者の神格化、戦争美化、弱肉強食の政経と教育、似非宗教の神聖視及びあらゆる拒天拒愛の道徳の正当化と繋がる。これらの立場は根本的に同じ未来の展望を人類に示す反道義的で罪悪を美德と拝む悪徳新興宗教の一種である。ところが、正伝キリスト教によると、万有を恵愛する天主が被造物の意思に服従するのではなく、被造物界が天主の聖旨に服従するのは唯一で正しい思考と生き方である。更に、真のキリスト教は自分の過去の過ちを反省しながら『天の父が完全であるように、あなた方も絶対神ではなく、人間として完全な者となりなさい』(マテオ, 5, 48) というキリストの呼びかけを自他人生の理想とする〔“CCC”¹⁾カカ日, 1422-2557. 更に、左側に該当する「デ・シ」の諸条を参照〕。

2. 「新時代」と正伝キリスト教の救済観

真の宗教と哲学は、人間の完全で逆転不可能な救い、つまり、永遠無尽で至福的な存在状態の獲得が万代万人の存在的な要求であり、人心の生得的な切望として人の究極目的であると説く。この永福の願望は一部の人々によって一時的に否認や無視されても、死の門に立った時に、精神的に余裕があれば必ず再認識されるものである。だが、2011年3月11日の津波が証明したように、この切望を再認識する時間と精神的な余裕が全くない場合もある。新時代の信奉者も同様な切望を抱いているが、その実現の道程と条件が仏教とかなり異なり、特に正伝のキリスト教と非常に違うのである。

新時代の精神的気風を生き方の理想とする者の救済観が今まで説述した彼らの「神」,^{キリスト}「救済的神知」と人間の理解⁽¹⁰⁾からして明らかである。人は「神」と呼ばれる永遠で無辺際の大靈知^{いらいりん}の一燐、つまり「ミニ神」であるから救済者を要せず、自力で永福の境地を獲得出来る。各人は自分を救うために、この世においても、死後においても、自らの魂の靈波を大靈知界の波長に忝に合わせて生きることは十分である。この「靈波同調」(at-one-ment)の大前提は自分が本来ミニ神であるという事実の再認識である。自己神性(一切衆生、悉有仏性)の自覚を取り戻した上で、各人に潜在する未開発の能力を無数の秘伝神知とその秘儀、つまり、種々の坐禅、ホリスティック瞑想、内観、占呪、催眠、交霊、人為的な臨死体験や過去輪廻の回顧等を通じて靈界と自然界と意識的に同調すれば容易に得るし、死後の幸福も確保できる。大靈知界との自波の同調は一回の人甕で得られなくても問題は全くない。この世においても死後界においても絶対的な真偽、正邪と善悪がなければ、それらに対する責任も問われることはない。そして、何よりも永遠の悪報、刑罰、極禍(地獄, Infernum, Hell)が全くなく、各自の本位的な選定で幾度も生まれ変わることが出来る。かくて、自分が決定した道程と方法で新しい体験と学習を積みながら好きなように自己を高め、何れ「神」との再一致に至り、本来の神性を取り戻すことになる(神格化, 再神格化)。

個人の靈的な進化と発展は社会と環境、更に、地球全体に影響を及ぼす。人類の歴史の中で同一の^{キリスト}「救済的靈知」の異なる生まれ変わりである始祖アダム、ヘルメス、オルフェウス、アミウス、メルキゼデック、ザラツストラ、ミトラ、釈迦牟尼とナザレのイエズス[おそらく老子も、孔子他も]の靈魂は全人類の神格化達成に並々ならぬ貢献をした。かくて、イエズス・キリストは特別な者ではない。彼の贖罪的救済(expiatio redemptiva)、特に十字架上の死と死者界からの復活は殆んど価値がない。彼の靈魂も他人の靈魂と同様に創世以前

に大霊知界内に霊知点として覚醒(創生)され、自由本位的に「神」との同一性を忘れ、一致を失った、つまり、原罪を犯したのである。イエズス・キリストとして生きていた霊魂は自力で自己救済を成し遂げ、幸福得道の単なる「大手本」に過ぎない。

H.P. ブラヴァツカ他の啓示と共に新しい世界観、価値観と救済の道を軸とする新文化の輝かしい時代(新時代、水神時代)の明星が人類の進化と科学的な発展の水平線に昇ったのである。或る者は新時代の本格的到来が救済的霊知の「同時多量の再受肉」(mass reincarnation)、他の者は「個人的な新受肉」(individual reincarnations)と共に始動すると主張する。先ず、H.P. ブラヴァツカが創設したフリーメーソンの母体「神知学会」の次期会長であった A. ベサーは J. クリシナムトリ (Jiddu Krishnamurti) を 1925 年に「世界大師」と宣言したが、彼は 1929 年にこれを公に「偽り」と認め、退位したことによって全作戦が失敗で終わった。次に、同結社の支流である「奥義学校」の精神を受け継いでいる B. クリム (Benjamin Creme) は人類の真大師たる弥勒大菩薩が 1982 年に世界テレビを通じて全人類に自分を公現し、世界平和と万民隆盛の時代である新時代の到来を生中継で宣言すると予告したが、未だ実現されていない。今度は E. ケーイシー、G. リッチと R. エビは救済的霊知が 1998 年に米国で新受肉すると預言し、新時代の多くの信奉者によって真実として認められているがそれも未だ確認されていない。

かくして、新時代は自己神格化を人衆の究極目的とし、自由本位的な名利私欲の成就を人間的な諸活動の規準とし、来る弥勒大師を世界的な政教と経済的制度の軸とする地上の大楽園を準備する。そして、彼らは幸福時代の到来を速めるために、一刻も早く腐敗したキリスト教の精神を撲滅し、新時代神知の主導で自己神格化を急ぐことが真の救済の直道であると宣伝する。

今度、2000 年を通じて正伝キリスト教、特にカトリック教会は堅持してきた救済観の教理を『カトリック教会の公教要理』とその要理の歴史的な発展及び内容を纏めた『カトリック教会公文書資料集』を基に新時代風行と真正なキリスト教の人類救済の違いを明示する⁽¹¹⁾。

第一に、人間の救済は、宇宙の創造とその維持と同様に三位一体的な天主の無償恵愛の賜物であり、特にイエズス・キリストの贖罪的な生涯、十字架上の贖罪的死、栄光の復活と昇天を源泉とする御業である。この救済は善意ある全ての人々に及ぶが、各人の神恵との自由で誠実な協力とそれに順ずる生き方によって実現する神福の永遠参与である。真の神でありながら罪を除いて真の人間でもあるイエズス・キリストのみ、唯一の贖罪主として人類を御父と和解させることが出来た。各人の意識的な重罪であろうと、集団の罪悪であろうと、罪は天主の叡智、恵愛と慈善の無視であり、極めて愚かな行為である。罪人は自分を絶対神の上に置くのである。こうした行為は無限の贖いを要するので、被造物である人類の贖罪能力外である。〔“CCC”と「カカ目」、50-184、410-623、1113-1690、1854-1879 条、更に「デ・シ」、1520-1583、2619 条〕。

第二に、正伝キリスト教が信ずる救いは、非神格的な大霊知界や仏性との個人霊波の同調、種々の秘伝神知、秘儀参加、自由本位的に遂行される輪廻転生を通じて得る自己神格化、神との同一性の再認識でなければ、「救済的霊知力」の同時大量の新受肉(新化身)や新救済主(弥勒菩薩)の到来というようなものではない。又、この救いは社会地位、経済力や軍事力によるものでなければ、先進国の陽気社会、個人の財宝、現世福祉、多額のお布施、コネや根回しで得るものでもない。正伝キリスト教が説く救済とは、キリストの全教に従って、正信を堅持しながら善行に励む信仰共同体のなかで「愛天愛人」と「七つの秘跡」の

道を歩み、生涯を終えた後の神福参与である。〔“CCC”と「カカ日」,1020-1060条,更に左条に該当する「デ・シ」の諸条を参照〕。

第三に、正伝キリスト教によると、天主が無償恵愛の故に、人間を救うためにすべきことは全てをしたが、この救済は強制ではなく、個人の自由で自主的な生き方によって初めて現実となり、死後永存の至福的な境遇と環境である。天主は、自由意志を持ってイエズス・キリストの恵愛とその教行証を拒んだり恥じたりした人、神法と自然法を無視しながら自己中心的に生きた者達に神福参加を無理矢理に押し付けないだろう。かくて、天主とその救済的な教行証を拒んで偶像を崇拜し愛した者は、神福の永遠参与ではなく、神愛のない環境、贖罪と赦罪のない自己意識、相互嫌悪、死にたくても死ねない状況と尽きることのない絶望感という心身的な苦獄の境遇と環境を自分の生き方の自然果報として獲得するであろう。〔同上〕。

第四に、真のキリスト教は、人類唯一の救い主であるイエズス・キリストが創世主たる御父の旨に従って設定した信望愛の共同体(教会)、洗礼、堅信、罪の赦し(本音を以て自分の罪悪を認め、改悛し、告白し、懺悔し、償いの誠意を示した者の罪が赦される)、ミサ聖祭、結婚、叙階(司祭職)と病者塗油という七つの秘跡を使徒時代から救いの道としている。教会はこれらの秘跡が信仰共同体における三位一体の天主、特にキリストの救済的な恩寵の特別な「担い手」と見做し、無大罪の状態でこれらの秘跡に参ずる者に神の特別な恵みと祝福が豊かに注がれると使徒時代から教示し続けている〔同上、特に“CCC”と「カカ日」,1113-1690条〕。

第五に、正伝キリスト教は、人類の救いにおいて聖母マリアの特別な位置づけと役割を使徒時代から一貫して認めている。聖母の無原罪性、聖霊によるマリアの無垢懐胎Immaculata Conceptio、キリストの受難に参ずる聖母とその被昇天という出来事も正伝キリスト教の教理である。聖母は教会の母、理想的な女性と母親、助けを求める罪人の為に三位一体の天主に執り成す方、そして、救われた者達の初穂と原型としてキリストに次いで崇敬されている〔“CCC”と「カカ日」,963-975条,そして左条に該当する「デ・シ」の諸条を参照〕。

第六に、正伝キリスト教が示してきた個人の永遠真福(救い)は必ず、地上を旅しながら成聖を追及し、キリストの神秘体Corpus Misticum(キリストを頭とす信望愛の共同体)である「普遍の教会」との一致においてのみ実現するものである。この教会は、天主の愛、救済と聖化の働きを源泉とする神寵、正しい信仰、秘跡と愛善と云う聖宝を有する共同体であり、天主の特別な現存の場(大秘跡)である。更にこの教会は、既にキリストの至福に参ずる「天国の共同体」、「煉獄の共同体」、そして、「地上を歩む共同体」という三界に分かれている。この三界の相互助け合いを「諸聖者の交わり」Communio sanctorumと呼び、祈り、執り成し、犠牲、そして特に愛善を以て地上と煉獄の共同体の救いを援助することが出来ると正伝キリスト教は使徒達の時代から堅持してきたのである。〔“CCC”と「カカ日」,946-962,そして左条に該当する「デ・シ」の諸条を参照〕。

第七に、正伝キリスト教は、イエズス・キリストの輪廻転生、霊魂移住や降霊によるキリストの新たな出現を否定する〔“CCC”と「カカ日」,668-682条,更に「デ・シ」,409-411,3839条〕。更に、ノストラダムス、H.P.ブラヴァツカ、秘伝神知教、秘伝真知学、心霊学、占術、交霊術、催眠術、呪詛術、神懸り、輪廻回顧術、宇宙人との交信、「臨死体験」等を通じて得た「千年に及ぶ善悪大決戦」、世界の破壊的な終末、救済的な霊知スピリチュアルの同時大量の輪廻転生や個人的な新受肉等の諸預言と啓示を全て否定する。正伝キリスト教は、イエズス・キリストが全てを公に語り、秘伝が全く無かったし今も無いと一貫して堅持する⁽¹²⁾。

3. 「新時代」と正伝キリスト教が示す人類の使命

第一に、正伝キリスト教が教示する三位一体的な唯一の超絶神(天主)の理解に対して、新時代は現象界と同質的で無位格的又は非位格的な大霊知界を「神」とみなす。

第二に、三位一体の天主による自分以外の絶無からの宇宙創造に対して、新時代は大霊知界の霊波による無量霊知点の覚醒と流出を主張する。

第三に、新時代は正伝キリスト教が認めている超絶神の御独り子の一回限りの受肉、イエズスとキリストの同一性と完全無罪性を否定した上、「救済的^{キリスト}霊知」と「イエズス」を区別する。イエズスとして生きていた霊魂は集団原罪を犯した無量初代霊の内の一つの個霊の輪廻転生であると説く。

第四に、新時代は、カトリックが教示するイエズス・キリストの贖罪的な生涯、特に彼の受難と死の一回性、その贖罪的な価値、万人の贖罪的な救済の成就、唯一の天主しか知らない時に訪れる現世の終末と完成、キリスト再臨の一回性と全人類の最後の公審判の一回性を否認した上、各人の自己神力による救済、救済的^{キリスト}霊知の同時転生、又は弥勒大師としての再受肉を唱えている。

第五に、新時代はイエズス・キリストの救済的な教行証の公言性、正伝キリスト教の聖典と聖伝を否定する。新時代によると、キリストが特選した弟子達に口頭で高貴な教えを秘伝したが、初代キリスト教はこの秘伝を排斥した。しかし、この秘伝は古今諸密教の外典、グノスティック神知とその秘儀として堅持され、新時代に受け継がれているのである。

第六に、新時代は正伝キリスト教が教示する天主の100%の超絶性(非物質性・純霊性)及び天主と人間との永遠無限の違い(異性異質性)を否定した上、神聖で無位格的(apersonal)な大霊知である「神」と人間の根本的な同質性(人はミニ神である)を力説する。

第七に、新時代は因果律を初め、正、邪、善と悪の現実と違い、善悪応報の正義及び各人の自己責任を否定する。新時代の論弁家によると、悪行や凶悪犯罪は悪でなければ罪でもない、自己責任や購いの義務を伴わない。人の諸行は人生の道において単なる学習であり、精神的な向上の一路であり、人類の究極目的である自己神格化へ導く行為として正当化されている。一方、正伝キリスト教は人間の行為に善と悪、正と邪、凶悪犯罪と至高の愛善、更に、自己責任、改心の必要性と購いの義務、死直後に各人の正邪と善悪を裁く天主の正義と慈愛及び死後の神福永遠参与(天国の至福)又は神福参与の拒否(天主の永福に与らない悪人の永禍の状態と環境、つまり「地獄」)をキリストと使徒教会の時代から堅持し公教する。

第八に、新時代はイエズス・キリストを初め、正伝キリスト教が示してきた天主の正義、地上人生の一回性と自主的な「拒天拒愛」の自然果報である永遠地獄という教理を否定する。その代わりに、各霊が恣に選んだ輪廻転生を通じて自力で永福的な境遇と環境を必ず獲得できると主張する。

第九に、新時代はキリスト教の教理を「神知の歪曲」として排擯する。その代わりに、氣随的な自己完成、名利私欲の追求と自己神格化を不可侵的な人権とし、群衆の迷信と自己中心的な幸せの妄想的な追求を悪用し、孤独で敬愛されていない人々の心を操作しながら支配する。こうした現代風の自己神格化を成就する為に種々の靈感、過去輪廻の回顧、内観、催眠、占い、交霊、霊媒、呪詛、秘儀や幻覚剤の服用によって引き起こされた似非の恍惚、体外離脱や臨死体験を通じて修得した啓示と予知を「不可謬の神知」と社会の要望に適した救済として唱道する。更に、それらの諸術を用いて金儲けに専念し、秘伝神知の獲得者を人類の大師、文化大転換の先駆者と万民政教統一の指導者として拝む。

第十に、人が人生の有為転変、苦悩と迷いを義人として生き、死して神福に参ることが出来るためにキリストが設定し、正伝キリスト教が今日まで救済正道の軸としている「七つの秘跡」は新時代の指導者たちによって排斥されている。特に赦罪の秘跡と聖体の秘跡(キリストの最後の晩餐、贖罪的な死と復活の神秘的な再現)が嘲罵され、人類進歩と至福の到来を妨害する愚信と見なされている⁽¹³⁾。

結語に代えて ～ 愛の空白化と人心の冷酷化

『私を愛する者は私の言葉を守る、私を愛さない者は私の言葉を守らぬ』(ヨハネ, 14:23-24)⁽¹⁴⁾

新時代の考え方と生き方は如何にして発生し、世界中で注目され、もの凄い勢いを持って広がり、人気を浴びているのであろうか。上説したところから観れば、新時代の風行が現代大文化の秩序と生き方の主流をなす諸大宗教、特に正伝キリスト教、ユダヤ教とイスラム教にとって猛脅威である。それぞれの宗教の本山と各国の指導部がこの風行を分析しながらその発生の主因と拡散の理由を指摘し、対策を練っている。ここで正伝キリスト教の分析を軸に、新時代運動人気の主因をまとめる。

第一の主因として人文科学と哲学の軽視と共に反神論的な実験科学の著しい進歩、生活の物質的向上に伴う自然科学の崇拜と超絶神を否定する「超人間」の神聖視が指摘される。

第二の主因として娯楽主義、自由本位主義、名利私欲主義、商売儲け主義の美化と共に大文化の道義とその主流価値観の相対化と衰弱化が浮かび上がる。その結果として、終生誠実な愛天愛人の生き方の軽蔑、伝統的な権威の無視、道德教育の放置、人心の砂漠化と冷酷化が挙げられている。

第三の主因として、新時代的な精神気風の大評判にも拘らず、永福を自然に求める人心は一時的で表面的及び物質的な利潤だけで充たされない事実がある。人は死後界を幾ら否定したとしても死後永福の要求が消滅されることはない。死が近づけば近づくほど人は「死にたくない」と強く観ずるのである。

結局のところ、真の天主を拒否する者と同様に、新時代の信奉者は無知や誤知からであろうと、一神教への嫌悪や悪徳クリスチャンへ復讐の心からであろうと、自己神性や科学万能への信仰からであろうと、「自業自得」の恐怖からであろうと、彼らもやはり病死苦を断ち、天国で永福を味わいたい。ただ、彼らは、無償恵愛と正義の天主が創設した秩序に則ってではなく、逆に、絶対神無しに、絶対神に従わず、絶対神を超えた巨人(新人類、神々)として自力だけで恣に自分の永福を作り上げようとする。

しかし、キリスト教内外の悪に対する責任を新時代側だけに負わせてもどうにもならない。実力あるクリスチャンの殆どは、キリストが自分の随従者に残した遺言を無視している。

『あなた達は私を愛するなら私の掟を守るであろう。…私の掟を保ち、それを守る者こそ、私を愛する者である。…私を愛する者は私の言葉を守る。…私を愛さない人は私の言葉を守らぬ。…私はあなた達を愛したようにあなた達も互いに愛し合うこと、これは私の掟である。…私の命じることを守れば(あなた達は)私の友人である。…あなた達が聞いているのは私の言葉ではなく、私を遣わされた父の御言葉である(ヨハネ, 14:15-16)。…全世界に行け、全ての国の人々を弟子にしなさい。…私があなた達に命じたことを、全て守るように教えなさい。私は世の終わりまで、何時もあなた達と共に居るのである(マテオ, 28:19-20)』⁽¹⁵⁾[線引きと太字は私の主張である]。

現代キリスト教の諸指導部の殆どは政経界の実力者と非常に親しい関係を保ち、政教的及び経済的な状況をよく把握するにも拘らず、政経界、諸大国とその国際組織による弱民の陰湿的な搾取と「弱肉強食」の現実を見て、建て前と口先の反対しかしない。こうして彼らは、弱者の身をして虐げられてい

る「キリスト」の奴隷化に事実上で協力するのである(「最も小さな者の一人にしなかったのは私にしなかったのである」, マテオ, 25:40-45)。クリスチャンはどうして、搾取者の機嫌を損なわないようにキリストの福音を水増しし、超越神を嘲笑う者に媚びるのか。どうして、信仰の兄妹を切り捨てて、反キリスト者を優先するのか。

キリスト教の諸指導部が行う新時代の発生と発展の分析は正しいと思うが、先ほど略述した三主因よりも、もっと重要な原因がキリスト教内部にあると私は考えている。少数を除いて、『私があなた達に命じたことを、**全て守るように教えなさい**』というキリストの言葉の中に「全て」という表現は空語となっている。教皇庁の教理省長官を務めていたヨゼフ・ラツインガー枢機卿(今は教皇ベネディクト XVI 世)の管下で教皇庁の聖書委員会が準備し、教皇ヨハネ・パウロ II 世が 1993 年 4 月 23 日に承認し公布を命じた『教会における聖書の解釈』(The Interpretation of the Bible in the Church)という公文書と、同管下で諸省委員から「カテキズム作成」の為に構成された特別委員会が準備し、同教皇によって 1997 年 8 月 15 日に認証され公布された『カトリック教会のカテキズム』を以て 2000 年間に亘るカトリック教会の聖書(特に旧約聖書)の伝統的な正伝解釈は幕を閉じた。これで、前提として天主を嫌悪しながら除外したり、又は否定したりするダーウィンの^{マクロエヴォルション}と新ダーウィンの進化論、モダニズムと新時代の「哲学」及び不合理と観察・調査データの偽造と隠蔽の混成である現代の自然科学の「成果」をプロテスタントとギリシア正教の大多数だけではなく、カトリック教会の本山も「キリスト教の信仰教理と両立できるもの」として事実上で受容し、諸教の反論を無視して公認したのである。かくて、現代カトリックの司牧者と信徒の多くは、旧約聖書が伝えている創世、人祖の創造とその原罪に関する啓示を「比喩」、「象徴」⁽¹⁶⁾や「神話」と解釈する。それによって、唯一の創造主であり、創造の第一目撃者と啓示の第一著作者である天主の啓示力の過失、その伝授法に不明瞭性と不適言、そして、啓示伝授の書き下ろしにも天主の指導の不行き届きが事実上で負わせられたのである。キリスト教の教権は信仰教理の面において、天主の完全な英智と明瞭な啓示(聖書)、キリスト教正伝と整然たる論理を有する科学の真理を新モダニズム、^{Macroevolution}進化論の支離滅裂な淘汰、無目的性、無罪悪性、惨虐性と斉一論的な科学の似非真理、つまり、天主が示す真理を反神論者の偽学の「シンリ」と所々に交換⁽¹⁷⁾したのである。信仰実践の面において、キリスト教世界における組織的分裂、信徒団内の貧富格差の拡大、信徒教化の放置、秘跡への尊敬激落と聖職者の神学的他の教育低下である。しかし、それらの源泉は言うまでもない、天主の全能全知へ信頼喪失とキリスト的な相愛実践の軽視にある。

クリスチャンの多くは、復活したキリストの現実性と「聖体」の形での特殊な現存、キリストの死の贖罪的な価値、大罪の告白義務、永遠地獄の現実性、聖母マリアの無原罪性、子どもをキリスト教的に教育する義務、絶対唯一神の崇拜と神仏的な偶像崇拜の矛盾やミサ参加中の身嗜みに疎い。司牧者の多くはそれらの教理が西洋の「文化的な産物」と「日本文化に馴染まない」ものとして軽視する。こうした精神状態は深刻ではないと言うならば、どうして墮胎、離婚、教会離脱者と「小教区難民」が激増しているのか。どうして司教団内と信徒団内の不和が増大しているのか。キリストとその教会の教理正伝の全てを伝えない司牧者と信仰の教理を知らない親は真正な宗教に疎い日本でキリスト教的な道を如何にして示すことが出来るのか。正伝キリスト教が啓示する恵愛と救いの天主の崇拜、「秘跡」と祈りの超自然的な効果を諸神仏や進化(*理知、自由意志と何の目的のない支離滅裂、必然で惨虐な生成発展*)を意図し、導く超絶神の崇拜、神仏論的な呪詛術や祝詞、坐禅、内観、無神論的な精神医療法、新時代的な靈気界波と個人靈気波の同調、和善やホリスティック瞑想という諸作法の現世的で儂い効果と混同してはならない。

キリストは或る時にこう言った、『盲人が盲人を天国への道案内できようか、二人とも地獄の穴に落ちないだろうか(ルカ、6:29). …「主よ、主よ」と言う人が皆、天国に入るのではない。天にまします父の御旨を果した人が入る(マテオ、7:9).』⁽¹⁸⁾。キリストの教えや正伝キリスト教の信仰教理を好い加減に解釈する者、特に聖職者はもはや真のクリスチャンではない。何故かと言うと、多神論、汎神論、新時代と進化論は事実上で、超絶神、人類の「原罪」、救い主の存在を史実無根の空言(比喩、象徴、神話)と断定する以上、キリスト教の根本的真理を否定⁽¹⁹⁾する。汎神論、多神論、神論、唯物論、相対論、経験論、進化論や不可知論はイエズス・キリストと正伝キリスト教が示す無上恵愛と救いの天主、宇宙万有の秩序、人類の使命、整然たる論理と人倫に悖り、矛盾だらけの偽学であり、邪道でもある。

我が国の諸放送局のメディア、教育者、科学者と有名人は、スポーツ、芸能界、政治、科学、動物権利、離婚自由化、女性(胎児墮胎)権利、自由競争権、経営改善策、占い、金儲けとトイレの神々までほぼ毎日絶賛する。それにも拘らず、どうして悪質的犯罪、若者と中年の自殺と親子殺人が急増し、どうして家庭内の孤独感、職場と地域社会の無縁化、福祉制度と政経秩序の崩壊、先が見えない社会的不安と様々な恐怖感が激進しているのか。この状況は先ず、キリストとその「愛天愛人」の道を愚痴と阿片として教育のカリキュラムから排斥し、天主無しに、天主に従わず、天主を超えたニーチェイズム、進化論、自然科学万能観と新ダーウィニズム的な「弱肉強食」という「死の文化」を教育のココロとした結果である。更に、アジアでも 19 世紀後半から天皇制、毛沢東主義、ポルポト主義と日本的全体主義は力を増し、多神論的、新時代的、新ダーウィニズム的な勝ち組と負け組み及び人糞の無目的観、つまり「死の文化」の秩序は公私活動の規準として見事に確立したからである。かくて、非キリスト教的な教育は、堅実にして有為な人間、高い教養、福祉の諸問題に即応できる人材、時代の危機を生き抜く人間力等の育成に全力を注ぐと唱えているが、事実上で、幼稚園から人心を曖昧にし、人間動物観(進化論)を植えつけ、若者の心を砂漠化と冷酷化させ、伝統的な正道、特にキリスト教的な道徳に背く自己満足 100%の追求、宗教嫌悪感、拝金拝益と絶望感に落ち込むまで「死の文化」を生き方の理想として積み込むのである。しかし、キリスト教徒はもとより、他教徒、無神論者と背教者も天主とその掟を愚弄してはいけない。

天主は通常、正伝の聖書、礼拝中、殉教者、聖者と大天災を通して語る。現代ではルワンダ大量殺戮(1994)とマザー・テレサのような聖者を通じて全人類、特に政経界の指導部、科学者と教育者に、自分たちの真の使命に目覚め、弱肉強食の自由競争を止め、「愛天愛人」に心を向けるよう、と呼びかけている。しかし、大多数の者は諸神論や背理的で惨酷な進化を意図し、導く絶対神の崇拝⁽²⁰⁾、進化論的や無神論的な科学の迷信と傲慢、自己神聖視又は自国民優秀性の錯覚、物質的と名利私欲的な幸福で心の耳を塞いで天主の警告を無視している。天主は凶悪の放埒の故に全人類を 2 回目に罰した後、『私はもう、人間の悪行の故に地をのろうことはすまい。…二度と全ての生き物を打ち滅ぼすことはすまい(創世記、8:7)』⁽²¹⁾と人類の代表であったノア一族に約束したが、蔓延している悪徳放埒の故に、天主は人類の一部を滅ぼさない、又は民族や地域毎に罰しない、と誰にも約束していない。キリストもそういう約束をしていないし、反って、誰も自他の死の時を予知できないから、何時も他界へ渉る準備をするよう、と強く戒めている。

天主の御摂理は最近の 20 年間だけで、被災者 1000 人を越える 28 の大天災、その内にイラン大地震 2 回(死者 8 万)、ジャラット大地震(死者 2 万)、スマトラ大震災(死者 23 万)、パキスタン大地震(死者 8 万)、四川省大

地震(死者8万), ミャンマーのサイクロン(死者14万), ハイチ大地震(死者31万)と原発大事件を含む東日本大震災(死者2.3万), 更に, 戦火, 旱魃と人為的な飢餓によるアフリカ各地(死者700万)と北朝鮮の大飢餓(100-300万人)⁽²²⁾の苦獄を人類に味わわせている。また, この20年間だけで人心の残酷化とその闇, 多民間の敵愾激増, 弱者の奴隷化, 政教学権力者の不誠実, 真理の歪曲, 慢心, 道德教育の風化, 敬虔なクリスチャンの陰湿的な嘲罵と差別, そして新旧偶像の崇拜をみると, 人類と我が社会の明日がはっきりと見えてくるのである。東日本大震災と原発の大悲劇も, 政経文界の無責任横暴, 責任者の偽善と傲慢な開き直り, 科学万能教の崩壊, 事後の屁理屈詭弁と欺瞞, マスメディアによる情報の操作, 悲劇地獄の隠蔽と「英雄」作り, 社会の精神的貧困, 同胞優秀性の神話的虚栄とその崩壊に伴う屈辱感, 無神論教育の空虚と汎神仏的宗教の唾然を毎日露頭している。これを現世の学識眼でみると, 確かに明日は怖く, 先が真っ暗でやり場のない恐動と絶望の状況である。しかし, 正伝キリスト教的な心眼でみると, 先ほど言及した悪の横暴, 悲劇と絶望感は, 天主とその御摂理の否定, 天主の超絶性への驚畏感の欠落, 天主の無限聖智と恵愛の無視及びあらゆる現世的な偶像崇拜の自然結果であると解る。各地の歴史が示しているように, 真福の「礎」である三位一体の天主, 特にイエズス・キリストの祝福と彼が示す「改心, 罪の悔い改め, 贖い, 赦し合いと愛天愛人」の道とその聖智の光, そして聖母の加護がない所に, 真の泰平も進歩発展も, 個人真福も社会福祉も, 家庭真和も職場で本音の友愛協和と自律も, 福死も死後永福(天国)も絶対^{てんげん}にあり得ない。各地で発生する「予想外」の天災, 社会と家庭内の諸悲劇は, 「愛天愛人」の道だけではなく, その道に参与する「正行と人情」, 「仁義礼知」や「清き明るき誠を以て世の為, 人の為」という路に真っ向から背き, 名利追求と人間動物観を教育の新しい創価とし, 「勝ち組」を公私活動の道義とする有識者と諸指導部への天主の大警告であり, 天譴である。世はこれをどう受けとめるのであろうか。ノアの時代, 第二次世界大戦や原発事件の前と同様に, 誰も改心しないであろうが, 天主は「愛天愛人」の掟に背く者と社会を今も罰することがある。天主は全能全智で無限至聖の御方であり, その掟も人間が制定する万法を卓絶し, 神聖である。我が社会, 特に教育, 宗教と経済界の諸指導者は現悪道を悔い改めなければ天罰を逃れない。この世で逃れても, 天主と「愛天愛人」の掟を無視する者たちの夢, 望み, 計らい, 発展, 名利の栄光と幸せは遅くとも死の瞬間で絶える。

この国の社会, 教育, 政経, 科学とマスメディアからも何故か無視され, 地球上にいないかのように扱われるが, 今日も人類の3割以上は「揺りかごから死の床まで」にイエズス・キリストとその前代未聞の教行証を自分の道, 知恵, 希望, 幸せと教育の「太陽」としているのである。その心は下記の通りである。

『《唯一の絶対》神は自分の独り子を与えるほどこの世を愛された。それは御子を信じる者が…永遠の命を得る為である。…父は私を愛したように私はあなた達を愛してきた。…私はあなた達を愛したよう, お互いに愛し合いなさい。…私はあなた達に私の平和を与える。この世が与えるような平和ではない。…心を騒がせることも, 恐れることもない。…私はあなた達を孤児にはしない。…私は道であり, 真理であり, 命である。私をとおらなければ, 誰も父のもと《天国》に行けない。…私の父の家には住いが多い。…行ってあなた達の為に場所を準備する。又戻ってきて, あなた達を私の所に連れて行く。…私の《全ての》言葉を聞いて行く者は皆, 岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。《人生台風の》雨が降り, 川が溢れ, 風が吹いてその家を襲っても倒れない。…あなたたちは《私の弟子である故に》この世で苦しみ, 迫害されるであろうが, 勇気を出せ, 私はこの世に勝ったのだ。…天地は過ぎ去るが, 私の言葉は過ぎ去ることはない。(ヨハネ, 13-16章, マテオ, 7と24章)⁽²³⁾』。〔〈〉内の文と線引きは私が付加した。〕

万物の超絶的な親である天主の無償無比の恵愛と救い, 特に贖罪的な死, 死者界から歴史的な復活と昇天を成し遂げた万有の王たるキリストと彼の再臨の約束を胸に, 今この国にも, 陰湿的に差別され

でも仕返ししない真のクリスチャンは生きている。私も最後の息を引取るまで天主の御心に従い、善意で真福を求める人々に役立つことができれば幸いである。

註

- (1) Norberto R.Carrera, “A Call to Vigilance”, (Pastoral Instruction on the New Age), 1996, in:<http://www.ourladywarriors.org/dissent/newage1.htm> (p.7) ^[03.viii]. Pontifical Council for Culture & Pont. Council. For Interreligious Dialogue, “Jesus Christ the Bearer of the Water of Life”(A Christian reflection on the ‘New Age’), 2003, in:http://www.vatican.va/roman_curia/pontifical_councils/interrelg/documents/rc_pc_inter...(pp.19-21) ^[03.viii]. K.Williams, “Cayce on religion”, in: <http://www.near-death.com/experiences/cayce09.html> (pp.3-1) ^[03.viii]. K.Williams, “Resurrection and Reincarnation”, in:<http://www.near-death.com/experiences/origen09.html> (pp.8-12) ^[03.viii]. K.Williams, “Edgar Cayce on consciousness”, in:<http://www.near-death.com/experiences/cayce04.html> (pp.4-7) ^[03.viii]. Eldon K.Winkler, “Basic Principles of the New Age Movement”, in: <http://www.mission.org/jesuspeople/basicprin.htm> (p.2) ^[04.i].
 【特註】この論究の中にこれから言う、「神」とは、多神教(神道の神々)、仏道、万有在神教(ヒンズー教の梵神、道・儒教の天神他)他の混合的信教の門徒が崇敬する自由知意のない無(非)位格的な存在・生命力・エネルギーや精霊を示すものである。新時代の「神」もそれと同様である。これらの「神」と正伝キリスト教徒が敬愛して礼拝する三位一体的で絶対的な超絶神(「天主」と全く異なる。正伝キリスト教の「神」とは、一切世界を超絶し、限界の無い神聖・神秘・善美と霊智等の徳力を本有する唯一無上の存在者であると同時に、一切世界の創造主であり、支配者である。イエズス・キリストの啓示と正伝キリスト教系の哲学及び神学によると、この天主が「純一」でありながら「御父・御子・聖霊」をして永存する。更に、「イエズス・キリスト」とは、先ほど言及した三位一体内の「御子」が歴史的なイエズスとして生まれ、人類の唯一の「救い主」であると考え。
- (2) K.Williams, “Resurrection and Reincarnation”, *ibid.*, pp.6-7,12. “Official Site of A.R.E.,” “Edgar Cayce on the Christ consciousness”, in:<http://www.edgarcayce.org/edgar-cayce1.html> (pp.1-3) ^[03.viii]. K.Williams, “Edgar Cayce on consciousness”, *ibid.*, pp.3-9. イエズス・キリストの靈魂の輪廻転生について K.ウィリアムス氏は, <http://www.near-death.com/experiences/origen04.html> (Jesus Reincarnation Index) という多数のウェブページで「新時代」の立場を詳説する。
- (3) K.Williams, “The NDE and Hell. K.Williams’ research conclusions”, in:<http://www.near-death.com/experiences/research14.html> (pp.9-10) ^[04.i]. そして, R.Nickels, “The New Age Movement”, in: <http://www.biblestudy.org/basicart/newage1.html>(pp.5-10) ^[03.viii] も参照。
- (4) E.キューブラー・ロス, 『死ぬ瞬間と臨死体験』, 読売新聞社, 31998, pp.174-193. C.Hux, “Near-Death Experience: Angel of Light”, in: <http://www.watchman.org/na/anglight.htm> (p.4) ^[04.i]. E.キューブラー・ロス氏について C.ハクスの情報は “The conversion of Kubler-Ross from thanatology to seances and sex”(キューブラー・ロス氏の「死の研究」から「交霊と性の研究」への移行)という “TIME” 週刊誌(1979.11.12日付)の記事に基づく。氏は死ぬ数年前に絶対神を「ヒトラー」と呼んだ(NHK.2004.12.25の教育番組)。
- (5) Pontifical Council for Culture &…*ibid.*, pp.19-22,32. R.Nickels, *ibid.*, pp.4,8,9. Elton K.Wrinker,*ibid.*, pp.1-9. K.Williams, “Dr. Melvin Morse’s research”, in:<http://www.near-death.com/experiences/experts06.html> (pp.2-3) ^[03.viii].
- (6) K.Williams, “The NDE and Pre-birth. K.W. research conclusions”, in: <http://www.near-death.com/experiences/Research01.html>(pp.3-6,8) ^[03.viii]. K.Williams, “Reincarnation and the early Christians”, in:<http://www.near-death.com/experiences/origen06.html>(pp.1-18) ^[03.viii]. K.Williams, “Reincarnation in Christian history”, in: <http://www.near-death.com/experiences/origen08.html>(pp.1-14). この論説の中で K.ウィリアムス氏は E.C.プロフェット氏の業績を讃え、靈魂の輪廻転生説がイエズス・キリストと初代会によって教示されていたかのように数々の偽書をもって証明する。Pontifical Council for Culture &…*ut supra*を参照。
- (7) K.Williams, “The NDE and Pre-birth. K.W. research conclusions”, *ibid.*, pp.1-3,5-9.
- (8) “CCC” *ibid.*, pp.76-105(293-421 条), 357-374(1420-1498 条), 430-611(1731-2557 条). 『カトリック教会のカテキズム』, *ibid.*, pp.90-121(293-421 条), 438-457(1420-1498 条), 528-731(1731-2557 条). デンツィンガー・シェンメッツァー, *ibid.*, pp.670-675(の解説と諸条). Pontifical Council for Culture &…*ut supra*を参照。更に, 『人々の禍福的運命』の「カトリックの教えによる人々の禍福的運命」という章の2,3と4項を参照。
- (9) 『人の死と死後』(カトリックの教えによる人生の展望), 鹿児島女子短期大学紀要, 44号(2009年), pp.115-136と45号(2010年), pp.53-73. 『聖書』(新約篇), p.342(ヘブライ人への書簡, 9.27). Catholic Answers, “Reincarnation”, *ibid.*, p.2《オリゲネスによると, 『ヨハネ洗礼者は自らがエリア預言者の生まれ変わりであると意識していたなら, そして, 彼の時代にユダヤ社会で輪廻転生説が公認されていたなら, どうしてヨハネ洗礼者は「自分の生まれ変わり」を否定した!》と》. “CCC” *ibid.*, p.246(1013 条). 『カトリック教会のカテキズム』, *ibid.*, p.305(1013 条). デンツィンガー・シェンメッツァー, *ibid.*, p.96(解説と403-404 条). 南山大学監修, *ibid.*, p.157[第二ヴァチカン公会議の「教会憲章」, 48 条].
- (10) R.Rhodes, *ibid.*, Part 1, pp.3,7. K.Williams, “Cayce on the future”, in: <http://www.near-death.com/experiences/cayce11.html>(p.12) ^[03.viii]. K.Williams, “The NDE and the Future - K.Williams’ research conclusions”, in:<http://www.near-death.com/experiences/research32.html>(p4) ^[03.viii]. K.Williams, “Resurrection and Reincarnation”, *ibid.*, pp.6-7,12. Official Site of A.R.E., “Edgar Cayce on the Christ Consciousness”, *ibid.*, p.1. K.Williams, “Edgar Cayce on consciousness”, *ibid.*, pp.3-9. K.Williams, “The NDE and Hell. K.Williams’ research conclusions”, *ibid.*, pp.9-10. そして, R.Nickels,*ibid.*, p.4-10 ^[04.i] も参照。Pontifical Council for Culture &…*ibid.*, pp.19-22,32. Elton K.Wrinker, *ibid.*, pp.1-9. K.Williams, “Dr.Melvin Morse’s research”, in:<http://www.near-death.com/experiences/experts06.html> (pp.2-3) ^[03.viii]. K.Williams, “The NDE and Pre-birth”, *ibid.*, pp.1-9 ^[03.viii]. K.Williams, “Reincarnation and early Christians”, *ibid.*, pp.8-9. Pontifical Council for Culture &…*ut supra*を参照。
- (11) “CCC”, *ibid.*, pp.19-48, [50-184 条], 155-161 [599-623 条], 104-105 [410-421 条], 454-458 [1852-1870 条], 266-275 [1020-1060 条], 289-420 [1113-1690 条], 247-254 [946-975 条], 174-178 [668-682 条]. 『カトリック教会のカテキズム』, *ibid.*, pp.24-57, 180-187, 119-121, 553-558, 306-317, 351-512, 287-295, 201-205 [条は“CCC”と同様]. デンツィンガー・シェンメッツァー, *ibid.*, pp.

- 681-711 及び 722-725.『人糞の禍福的運命』という連続論文の「カトリックの教えによる人糞の禍福的運命」の 3-8 項, 更に, 本連続論文の「カトリックの教えによる人の死と死後の運命」の 2-6 項を参照.
- (12) 正伝キリスト教の立場の根拠はマルコ, マテオとルカが伝えているイエズス・キリストの言葉である.『聖書』(新約篇),pp.74-75, 43,125. 43,125.新時代運動の先駆者と現代信奉者の偽預言及び詭弁的な解釈の一例として: K.ウィリアムス, “The NDE and the Future - K.Williams’ research conclusions”, *ibid.*, pp.1-23.を参照.
- (13) “Pontifical Council for Culture &...”, *ibid.*, pp.33-39(4 条),26-27(2 条).Norberto R.Carrera,*ibid.*, pp.7-11(23-39 条),2-4(6-11 条).“CCC”, *ibid.*, pp.254-276(976-1060 条),334-382(1212-1532).『カトリック教会のカテキズム』, *ibid.*, pp.295-319,403-464 [条は“CCC”と同様].
- (14) 『聖書』(新約篇), p.162.
- (15) 『聖書』(新約篇), pp.162-163,50.
- (16) 『カトリック教会のカテキズム』, *ibid.*, pp. 102-115(特に 337,362,375,390,391,396 条). PIBC, “The Interpretation of the Bible in the Church”, Vatican,1994 (全書). “Messaggio di Giovanni Paolo II ai Partecipanti alla Plenaria della Pontificia Accademia delle Scienze”, 1996, Oct.22. JP11, “Veritatis Splendor” 回勅, Vatican, 1993. 教皇ベネディクト 16 世, “Verbum Domini” 勅勅, 2010, 特に, 「教会における聖書の解釈について」.
- (17) 教皇ピョ 10 世の “Pascendi Dominici Gregis” 回勅, 1907. Walt Brown, “In the Beginning”, Center for Scient.Creation, 2008(全書). Walt Brown, “In the Beginning”(Compelling Evidence for Creation and the Flood), Center for Scientific Creation, 2008[1980], 全書[特に pp.1-314]. M.L.Lubenov, Bones of Contention, Baker Books, 2000(全書). G.J.Keane, “Creation Rediscovered”, Tan B. & Publ.Inc, 1999, pp.3-320. Victor P.Warkulwiz, MSS, “The Doctrines of Genesis 1-11”, iUniverse, Inc, 2007 [カトリック正伝神学による創世論, 真の自然科学と進化論による宇宙論の理解 (全書). T.Mortenson, Edit, “Coming to Grips with Genesis”, Master B, 2010(全書). W.Johnson, “Death of Evolution”, 1986(全書). G.Simmons, “Billions of Missing Links”, Harvest House.Publ., 2007[進化論は全く証示していない進化過程内の「中間的生物」](全書). 渡辺久義他, 『ダーウィニズム 150 年の偽装』, アートヴェレッジ, 2009(全書). W.A.Dembksi “The Design Revolution”, InterVarsity P.2004(全書). H.W.House, “Intelligent Design 101”, Kregel Publ, 2008. Card.C.Schönborn & “Creation and Evolution”, Ignatius P.2007(特に pp.8-19). Card.C.Schönborn & “Chance or Purpose”, Ignatius P.2007(全書). Benedict XVI, “Homilies on Epiphany & Resurrection”, Vatican, 2011, Jan.& Apr.[宇宙と人間の出現は, 理知と自由意志のない偶然力の結果ではなく, 創造主の理智, 自由意志, 無償敬と無尽創造力の被造物であり, その活動の足跡であると再確認する].
- (18) 『聖書』(新約篇), pp.95,14. M.Sharkey(ed), “Int.Theol.Comm. Texts and Documents 1986-2007”, Ignatius P., 2009, pp.1-21,55-186.
- (19) David E.Shormann, “The Exchange of Truth”, iUniverse, Inc, 2007, 特に pp.103-120. J.Lisle, “The Ultimate Proof of Creation”, MB, 2009, pp.11-104. 更に註(20)を参照. 特に, W.Johnson, Card.C.Schönborn, Victor P.Warkulwiz, G.J.Keane, T.Mortenson.
- (20) John F. Haught, “Responses to 101 Questions on God and Evolution, Paulist Press.2001[全書]. Philip J. Porvaznik’s personal Web Site (<http://www.philvaz.com/apologetics>), 特に “Theistic Evolution vs. Six-Day Creation : Reply to Robert Sungenis”, in:<http://www.philvaz.com/apologetics/p63.htm>. Ameh A.Eleh, “Scientific Evolution・Creation Theologies and African Cosmogonies in Dialog, Xlibris Corp.2008[全書]. 更に註 16 を参照. マクロエウォルションをキリスト教の創造論に取り込もうとする者は, 進化論者による無数の科学的データの隠蔽, 操作と偽装を真理とする他, 超絶神の創造的行為に悖理性と惨酷性, その啓示に曖昧性と欺瞞性及びキリストによる贖罪的な救いの不要性を帰すると認識していないようである. つまり, マクロエウォルションを意図し, その必然的, 背理的で惨酷なプロセス(自然淘汰)を導く「絶対神」を提唱し崇拝する.
- (21) 『聖書』(旧約篇), pp.19,15-20.
- (22) Wikipedia からのデータ, 特に, List of Earthquakes, List of 21 Century Earthquakes. List of Great Famines.中華, 北朝鮮とアフリカの真の数値は確認不可能. 20 世紀の大虐殺ワースト 20 (ルワンダ, 100 日で凡そ 100 万人).
- (23) 『聖書』(新約篇), pp.14,41,74,158-167.

主な使用文献

BIBLIA SACRA (Vulgata), 2vls.	Deutsche Bibelgesellschaft	1985[‘69]
聖書 (旧約・新約)	フェデリコ・バルバロ訳	172008[1980]
Catechism of the Catholic Church (CCC)	Holy See	Lib.Ed.Vaticana 21997[‘94]
カトリック教会のカテキズム	日本カトリック司教協議会	カトリック中央協議会 22002[同年]
カトリック教会公文書資料集	デンシinger 他(編)	エンデルレ書店 1974
The Sources of Catholic Dogma [Enchir.Symb]	“Denzinger”(transl.Roy J.Deferrari)	Loreto Publ. 32007[‘02]
Jesus Christ the Bearer of the Water of Life	Pontif.Counc. for InterrelD	Vatican Publ. 2003
A Call to Vigilance	Norberto R.Carrera	in: http://www.ourladywarriors.org/dissent/newage1.htm (pp.2-6) ^[03.viii] .
神學大全 (聖トマス・アクィナス著)	高田三朗 (全訳責)	創文社 1960-67
希望の扉を開く	ヨハネ・パウロ二世著	同朋社 1996
死の神秘	デュブル・X.L. 著	あかし書房 1986
Veritatis Splendor [回勅]	John Paul II PP	Vatican Press 1993
ITC Texts and Documents 1986-2007	M.Sharkey etc(ed)	Ignatius Press 2009
Creation and Evolution	Chr.Schönborn & Others	Ignatius Press 2007
Chance or Purpose	Chr.Schönborn, Card.	Ignatius Press 2007
Creation Rediscovered	Gerard J.Keane	Tan Books & Publ. 21999[同年]

The Doctrines of Genesis 1-11	Victor P.Warkulwiz,MSS	iUniverse,Inc.	2007
Coming to Grips with Genesis	T.Mortenson, Edit.	Master Books	⁵ 2010[‘08]
The Death of Evolution	Wallace Johnson (J.W.G.Johnson)	Tan Books & Publ.Inc.	1986
30 Theses Against Theistic Evolution	Paula Haigh	http://www.catholicapologetics.info/modern-problems/evolution/etheistic.htm	1976.
In the Beginning	Walt Brown	Center for Scientific Creation	⁸ 2008[‘80]
Bones of Contention	M.L.Lubenov	Baker Books	⁹ 2000[‘92]
The Exchange of Truth	D.E.Shormann	iUniverse Inc.	2007
The Ultimate Proof of Creation	J.Lisle	Master Books	⁴ 2011[‘09]
Billions of Missing Links	G.Simmons	Harvest House Publ.	2007
ダーウィニズム 150 年の偽装	渡辺久義他	アートヴィレッジ	2009
The Design Revolution	W.A.Dembski	InerVarsity Press	2004
Intelligent Design	H.W.House	Kregel Publ.	2008
仏性の研究	常盤大定著	国書刊行会	⁴ 1988[‘73]
菩薩観	日仏思想研編	平楽時書店	1986
全訳正法眼蔵 5 篇(含前巻要約)	中村宗一他	精神書房	¹⁸ 1990[‘71]
正法眼蔵啓迪上中下巻	西有穆山著	大法輪閣	¹⁴ 1990[‘65]
教行信證講義全 3 巻	山邊習學と赤沼智善	法蔵館	¹¹ 1985[‘52]
真言の教学上下	勝又俊教著	国書刊行会	1981
仏教における生死の問題	日仏学会編	平楽寺書店	³ 1988[‘81]
悟りと救い	日仏学会編	平楽寺書店	³ 1989[‘79]
死	日本思想研編	平楽時書店	1988
解脱	日本思想研編	平楽時書店	² 1988[‘82]
業論	福原亮庵著	永田文昌堂	1982
往生要集上下	原信著(石田訳注)	岩波文庫	² 2003[‘92]

“New Age”(NAM)

http://en.wikipedia.org/wiki/New_Age

“New Age Spirituality”

<http://www.religioustolerance.org/newage.htm>

Edgar Cayce’s A.R.E.(Association for Research and Enlightenment).

<http://www.edgarcayce.org/>

Kevin William, “Near-Death Experiences and the After-Life”.

<http://www.near-death.com/>

J.& Jody A. Long 他, “Near Death Experience Research Foundation”(NDRF)

<http://www.nderf.org/>

“Out of Body Experience Research Foundation”(OBERF)

<http://www.oberf.org/>

“After Death Communication Research Foundation”(ADCRF)

<http://www.adcrf.org/>

Diane Corcoran 他, “The Intern. Assoc. for Near-Death Studies”(IANDS)

<http://www.iands.org/>

“New Thought Movement” HP.

<http://websyte.com/alan/>

世界規模の主な「新時代運動」団体.

諸種の「秘伝神知や秘伝秘儀」の組織(Theosophi Societies), 秘密諸結社(Freemasons), 人知学会(Anthroposophic Society), 奥義学校(Arcane School), 新時代思想(New Age Thought), 「イセイレン共同体」(Esalen Community), スコトランドのファインドホーン共同体(Findhorn Community), ニュ・ヨーク市の「オープン・センター」(Open Center), 「精神最先端の国際同胞会」(Spiritual Frontiers Fellowship International), スイスの「モンテヴェルデ共同体」(Monteverde), 「創価学会」と「公明党」(Soka Gakkai and Kometo P.Party), 「世界基督教統一神霊協会」(統一教会, The Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity).

Resume

The Anthropology of NAM

～A Catholic Anthropological Evaluation～

This paper contains an outline of crucial doctrines of the NAM’s Anthropology and their evaluation from the Catholic orthodox perspective. The NAM is thus sometimes called a “Divine Regeneration Movement”.

The following are the crucial doctrinal differences between the NAM’s and orthodox Catholic Anthropology :

1. NAM’s adherents argue for the impersonal or apersonal, immanent, amoral yet spiritual character of a Being, called “God”, what clearly contradicts the orthodox Christian understanding of God and His nature.

2. The newagers advance a hypothesis that “the sc. God brought forth...individual creatures like Itself that share in its life....So within the Great Universal Consciousness many individual points of consciousness [including the Christ’s] were awakened and given freedom....With the laps of time, some separated from the Whole of the Universal Consciousness,... entered the Earth environment,...took on the material bodies and evolved into human beings” [E.Cayce, J.Van Auken]. Therefore, the whole creation is meant to be the “God exploring Itself” through an ongoing and progressive evolutionary development. This stands in apparent conflict with the orthodox Christian dogma of creation of the Cosmos by the whole Holy Trinity “ex nihilo Suoi et subiecti”.

3. The NAM advocates deny the true divine character of Jesus Christ, His unique historical and redemptive life, free of any sin and advance the theory of multiple reincarnations of the ‘Christic Consciousness’ on the Earth. The details of NAM’s Christology were analyzed in the previous (AD.2010)paper.

4. The new Age followers teach the essential and substantial identity of God ('Pure Universal Consciousness') and the individual human nature. The human being is a "spark" of Divinity. This runs against the Christian doctrine of the essential, substantial, existential and eternal difference between the God and humanity as well as between the God and the rest of creation.

5. The NAM's thinkers not only ignore the universal laws of causation, retribution and justice but reject the reality of eternal damnation and moral accountability even for the most hideous acts against the God and humanity. Instead, they offer a belief in self-deification of all human beings at one's own will, here and after death, regardless of any crime they might have committed.

6. They assert that there is no sin, no evil, no crime, no criminal or evildoers and no responsibility for the sc. moral evil. All human acts are nothing more than the "lessons" of life, the "experiences to be made" in the process of attaining the ultimate goal of human existence, i.e. the individual self-deification. The "Love toward the One God" is not necessary for eternal salvation.

7. The NAM rejects any religious authority, Christian sacraments and substitute them with all sorts of spiritual masters, spiritists, sorcerers, psychotherapists, hypnotics, NDErs, OBErs, magicians, healers, visionaries, NAM's prophets, mediums or other occultists who guide and teach people how to obtain the state of self re-deification and create for themselves the happiness, without any moral, religious life and the transcendent God. 《For the details see the Catholic, Orthodox & Protestant evaluations of NAM; available everywhere》.

The roots of NAM. Many scholars, especially those of the monotheistic religions, see the ancient religious esotericism, philosophical syncretism, the shamanistic practices, the non-dualistic religions' theologies and anthropologies, Masonic ideals and their occult practices, the capitalist and communist exploitation and their utopia, an absolute faith in atheistic science, evolutionism and technology, the desolation of human hearts, the widespread religious and moral decadence, the eradication and relativization of moral values, a strong antipathy towards the orthodox religions, a fictitious attempts at self-deification and delusive strive to create one's own terrestrial and even post-mortal happiness at one's will *as the roots and principal causes* of the NAM's origin and its rapid growth. The causes enumerated above are undoubtedly true. Yet it seems to me that most of the NAM and anti-NAM partisans absorbed by proving the 'pros' and 'contras' of theological, philosophical and moral veracity and loyalties, overlook the most important and crucial causes of the NAM's origin and its striking success. The NAM's emergence and popularity is *a side-effect* of the millenary or at least tricentenary lukewarm hypocrisy and decadence of rich and noble Christians, Buddhists, Mahometans, their quasi-divine or God-appointed institutional leaders; abandonment of honest orthodoxy and respect toward some fundamental Christian doctrines even by the highest hierarchs and scientists; nestling down into modernism; indifference towards exploitation, political oppression and economic terrorism; giving up the preaching of all teachings of Christ and His Church to seminarians and faithful. My analysis of the principal causes of NAM's success can be summed up in the corruption of sciences, desolation of human hearts, modernistic skepticism of majority of Christian theologians and scientists towards the Divine Revelation in Holy Scripture and replacement of the 'Christian Love of God & of Neighbor's precept with sanctification of the evolution and its "Law of Jungle" (the 'Natural Selection of the Fittest').

完

(2011年12月6日 受理)